

おくりびと

2008(平成20)年9月14日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★★



監督=滝田洋二郎/脚本=小山薫堂/出演=本木雅弘/広末涼子/山崎努/吉行和子/余貴美子/笹野高史/山田辰夫(松竹配給/2008年日本映画/130分)

第3章

意外な設定が興味をひく

……納棺師ってナニ？ そんな特殊な稼業に焦点をあて、日本の様式美をモントリオール世界映画祭に知らしめたのがこの映画！ 父と息子の確執がテーマだが、それを石文のエピソードに込めたところがミソ。モックんこと本木雅弘の誠実で美しい演技と、山崎努、広末涼子、吉行和子ら、それを支える俳優の充実ぶりにも注目！ そして、オリジナルな企画を見事にまとめあげた滝田洋二郎監督の手腕に拍手！ 庄内地方を舞台にした「あの名作たち」以外に、「もう1つの名作」がここに誕生！

藤沢作品以外にも庄内を舞台とした名作が！

庄内といえば藤沢周平、藤沢周平といえば海坂藩。庄内地方にあるという架空の海坂藩を舞台とした藤沢周平原作の時代劇の名作は、①『たそがれ清兵衛』(02年)、『シネマルーム2』68頁参照)、②『隠し剣 鬼の爪』(04年)、『シネマルーム6』188頁参照)、③『蝉しぐれ』(05年)、『シネマルーム8』200頁参照)、④『武士の一分』(06年)、『シネマルーム14』318頁参照)、⑤『山桜』(08年)、『シネマルーム19』394頁参照)と既に5本。

ところで、庄内ってどこにあるの？ それは山形県だが、庄内町や庄内空港はあるが庄内市は存在せず、『おくりびと』の舞台も庄内地方(庄内平野)にある山形県酒田市と鶴岡市。「本作の舞台は庄内平野という風土が題材的にしっくりくるという理由から、山形県酒田市に決定」したとのことだから、藤沢作品ほど庄内地方に思い入れがあるわけではない……？ しかし、ロケハンで使った①大悟の自宅、②NK エージェントの建物、③銭湯「鶴乃湯」そして④大悟がチェロを弾く河川敷などの雰囲気

は、東京から「都落ち」して田舎に戻ってきた大悟が再生していく場所としてピッタリ！

ここに、藤沢作品以外に庄内を舞台とした名作が誕生！

「士」もいろいろ、「師」もいろいろ

弁護士の増員問題は司法改革における1つのテーマだが、弁護士の周辺には公認会計士、税理士、司法書士、行政書士、土地家屋調査士、不動産鑑定士などのたくさんの士業（さむらい業）があるから、その役割分担も大きな問題。このように「士」もいろいろだが、「師」もあん摩マッサージ指圧師、整体師、占い師、詐欺師（？）などいろいろある。そして、私がこの映画ではじめて知ったのが納棺師。

ちなみに、あん摩マッサージ指圧師は、「あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師等に関する法律（通称あはき法）」にもとづく国家試験に合格した有資格者。しかし、整体師には資格制度も国家試験もなく民間資格であるため、各種整体団体の「認定証」と「修了証」の発行を受けて整体師となるが、主催組織によって資格の付与条件が一律でないため、極端に言えば誰でも整体師と名乗ることができるらしい。もっとも、接骨院の先生になるためには柔道整復師という国家資格が必要らしい。また、占い師も勝手に師と名乗っているだけ。すると詐欺師は？ 詐欺師はきっと自分で師と名乗らないから、問題外……？

そう考えると、納棺師とは？ そこで調べてみると、やはり納棺師も師と名乗っているものの、国家試験もなければ公的資格もなく、協会所属の専門職の1つにすぎないようだ。

2文字増えればえらい違い！ こんな略称あり？

現在大問題となっている汚染米事件はあまりにひどいが、これをはじめとして、今や日本国は偽装！偽装！のオンパレード。しかるところ、小林大悟（本木雅弘）が新聞広告で見た「年齢問わず、高給保証！ 実質労働時間わずか。旅のお手伝い。NK エージェント!!」も弁護士の目で見れば明らかに偽装……？

だって、「旅」と「旅立ち」は、2文字増えるだけで大違い！ また、「空気を読めない」を「KY」と略称（？）するのは一般化しているが、納棺を「NK」と略称しても、それがわかるのは当事者だけ……。

山崎努のたしかな存在感に感心！

そんな偽装広告を堂々と出し、面接にやって来た大悟を、履歴書にロクに目を通すことなく即「採用！」と宣言したのが、NK エージェントの社長佐々木生栄（山崎努）。今や日本を代表する味わい深い俳優の域に達した山崎努は、この映画でもどっしりとした存在感を見せている。

長年人間（死人）を相手としてNK エージェントの仕事をしてきた中、相手の心はすべてお見通しというレベルに到達した今の佐々木は、大悟の心の中の動揺など手にとるように見えているらしい。さて、NK とは納棺、したがって自分の仕事は安らかな“旅立ちのお手伝い”、つまり遺体を棺に納める仕事だとわかった大悟はどんな対応を？ 現金を握らされたこともあって佐々木のペースのまま仕事を引き受けてしまった大悟は、帰宅後妻の美香（広末涼子）に「冠婚葬祭の仕事……」とあいまいな返事をしてしまったが……。

広末涼子の「汚らしい！」をどう解釈？

NK エージェントに就職した大悟の初仕事は、腐乱死体の処置というあまりにも刺激的の強すぎるものだったから、大悟は大ショック。ちなみに、私も弁護士という職業柄、腐乱死体のあるアパートの中に最初に乗り込んで行った経験があるが、その臭いはすごいものだった。もっとも、私はその場の状況を確認し、あれこれ指示を出して行けばいいだけだったが、大悟は佐々木と共にその死体の「処置」をしなければならぬから大変……。

それはともかく、はじめて大悟が納棺師の仕事をしていると知った美香のショックが大きかったのは当然。この映画は、納棺師という珍しい職業を演ずる本木雅弘が主役だが、それを支える妻美香を演ずる広末涼子もいい演技を見せている。美香は、今ドキこんな嫁さんはいないのではないかと思えるほどいい嫁さん。だって、楽団をリストラされてもガミガミ言わず、山形の田舎にUターンすることにも笑顔で賛成してくれたのだから。そんな美香だったが、大悟が何の説明もないまま納棺師の仕事に就き、ちょっと人サマには見せられないような宣伝ビデオに主演（？）している姿を観た時は、堪忍袋の緒が切れたようだ。

そんな美香のショックの大きさを示すのが、大悟に対して「汚らしい！」と叫ぶ

セリフ。そして、美香に触れようとする大悟を振り払い、触られるのを断固拒否する美香の姿。福沢諭吉は『学問ノススメ』の中で「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と書いたはずだが、納棺師ってほんとに汚らしいの……？

同級生からも、きつい言葉が

愛妻から「汚らしい！」と納棺師の仕事を拒否されたうえ、「そんな仕事、早く辞めて」と言われたら、亭主のショックが大きいのは当然。それが倦怠期の夫婦ならまだしも、子供もなく新婚生活の延長のような相思相愛の夫婦であればなおさらだ。

それに追い討ちをかけるショックとなったのは、大悟が故郷に帰ってきたことを知った同級生の山下から、当初は大歓迎されていたのに、大悟が納棺師の仕事をすることが知られたとたん急に冷たくされたこと。つまり、山下の母親ツヤ子（吉行和子）が経営している銭湯「鶴乃湯」で会った時は、彼の妻子にもやさしく紹介してくれたのに、今まちで偶然すれ違った時はまるで汚いものを見るかのような目で大悟を見たうえ、妻や娘には大悟と接触させないようにしていたから、そりゃひどい。さらに、そんな山下の大悟に対する秘かなアドバイス（？）が、「みんなの間で評判だぞ。早くまともな仕事を探せよ」だったから、大悟にはそりゃこたえたはず……。

父親の記憶は？ 父親との確執は？

映画の冒頭をはじめとして、数シーンで見せる本木雅弘のチェロの演奏ぶりは大したもの。幼い頃にチェロの練習を始めた大悟には、妻子を捨てて女と一緒に出て行った父親の記憶は、チェロの演奏を厳しく見守っている姿くらいしか残っていないようだ。また、女手1つで大悟を育ててくれた母親を数年前に亡くした大悟にとって、故郷山形は本来縁遠い場所だったはず。

しかし、交響楽団の解散という思いもかけない事態の中、演奏家としての能力の限界も悟った大悟の決断は、故郷へのUターン。当然反対されると思った美香がいつも簡単にオーケーしてくれたのは意外だったが、これにより大悟の第2の人生は故郷でじっくり、ゆっくり進んでいくはず。そう考え、そう実践し始めた大悟は、父親の記憶についてはどこでもあっさり語っていたが、実はその心底は？

大悟にとっての幼い頃の父親の記憶とは？ そして、ラストに訪れる思いがけない事態の中、父親との確執をずっと持ち続けてきた大悟が見せる行動とは？

いしぶみ 石文のエピソードが面白いにつけに！

この映画で私がはじめて知ったのが石文。これは脚本を書いた小山薫堂が、今は亡き脚本家・向田邦子のエッセイ『無口な手紙』（エッセイ集『男（お）どき女（め）どき』（新潮社刊）より）の一節からヒントを得たもので、大昔、人々がまだ言葉を知らなかった頃、遠く離れた恋人へ自分の想いに似た石を探して送ったらしい。つまり、つるつるの時は心の平穏を想像し、ゴツゴツの時は相手を心配したりしたということだ。もっとも、これは月光川の川原で大悟が美香に語りながら、白くて丸い石をそっと渡すシーンで語られるものだから、どこまでホントかは不知。

そんな石文のエピソードがこの映画ではメリハリのきいたシーンで登場し、実にいい味つけを与えている。石文に託した石の登場は3度。第1は、亡母が残した故郷の家に戻り、子供時代に弾いていたチェロを取り出したところ、チェロを支えるためにケースの中に置かれていた石文。第2は、前述の大悟から美香に手渡される石文。しかして、3度目に登場する石文は？ クライマックスシーンにおける、小さな石文の登場（発見）に、きっとあなたも涙するはずだ。

百合子の過去は？

余貴美子演ずる上村百合子は、長年NK エージェントに勤めているたった1人の事務員だが、彼女の過去は？ 社長1人、ベテラン女事務員1人の会社では、まれに男女の仲が疑われるケースもあるが、佐々木と百合子の2人に限ってはそれはなさそう。大悟が今NK エージェントに定着しているのは、少しずつ大悟が人間として成長してきたことの証だが、あるところから流れてきたという百合子が長年NK エージェントに定着しているのはなぜ……？ そしてまた、こんな小さな職場では互いの人間性や人生観が絡まるが多くなるのは仕方ないが、「父危篤」の電報が届いた時、百合子が必死になって大悟に対して「行ってあげて」と訴えたのは、一体なぜ……？

人間長く生きていれば、当然にいろいろなドラマがあるわけではなく、やはりいろいろなドラマのある人生を生きてきたからこそ、こんな百合子の現在の生きざまがあるのだということを、きっと実感できるはず……。

吉行和子もいい味を

石文のエピソードも面白いが、この映画では「鶴乃湯」という銭湯が山形の田舎の雰囲気をもっと醸し出しているうえ、そこをキーステーションとした人間模様を浮かびあがらせているところが面白い。それを演出するのが、銭湯のおばちゃん山下ツヤ子を演ずる吉行和子。作家吉行淳之介の妹で、演技派ベテラン女優の吉行和子は、『佐賀のがばいばあちゃん』（06年）では久しぶりの主役を張ったが（『シネマルーム11』102頁参照）、円熟の域に達したこの女優には、やはりワンポイントの味つけがふさわしい。

今や昔ながらの銭湯の経営が厳しいことは明らか。したがって、息子がこんな銭湯は早くやめて跡地にマンションを建てようとさかんにアドバイスしたのは当然。さて、ツヤ子はいつまで女手一つで「鶴乃湯」を守っていくのだろうか？ また、そんなツヤ子の姿を見て、大悟と共に山形の田舎に戻ってきた美香が感じるものは？ ベテラン女優吉行和子が見せる、そんないい味をしっかりと感じとりたいたいものだ。

正吉はてっきり銭湯のオヤジかと……

直近の『次郎長三国志』では法印大五郎の役を、『イキガミ』（08年）ではちょっと恐い石井課長の役を演じた、名脇役として貴重な存在の笹野高史が、『おくりびと』では鶴乃湯の常連客の平田正吉として登場する。いつも脱衣場にどっかりと座って1人将棋を指しているうえ、ツヤ子と親しげな口をきいているから、私はてっきり彼はツヤ子の亭主で、銭湯のオヤジだと思っていた。ところが、実はこの平田は意外なシーンで意外な服装で意外な役として登場するから、それに注目！

年輪の豊かさと人生の重みをチラリと語らせれば、やはりこの俳優は超一流。

ベネチアはダメでも、モントリオールが

2008年8月27日～9月6日に開催された第65回ベネチア国際映画祭には、①北野武監督の『アキレスと亀』、②宮崎駿監督の『崖の上のポニョ』（08年）、③押井守監督の『スカイ・クロラ』（08年）の3作品が出品されたが、金獅子賞は『レスラー』（08年）が受賞し、残念ながら日本の3人の「巨匠たち」の作品の受賞はならなかった。

他方、08年8月21日～9月1日までカナダで開催された第32回モントリオール世界映画祭で、『おくりびと』は第30回における奥田瑛二監督の『長い散歩』（06年）に続いて見事にグランプリを受賞した。『おくりびと』はきわめて日本的な作法での納棺儀式の美とそれに想いを込めた日本人の心を描いた映画だから、外国人には理解しづらいう。それを見事にクリアしたのは、この作品の品格ともいべき美しさだ。お葬式をテーマとした映画には、『お葬式』（84年）、『ハッピー・フューネラル』（01年）などの傑作が多いが、それはこのテーマには人間の本质や本性がモロに表れるため。納棺という通常取りあげにくいテーマに大胆に挑戦し、ここまで「品格ある作品」に仕上げた滝田洋二郎監督とそのスタッフに拍手を送りたい。

感動的なラストシーンに思わず涙！

幼い頃に別れた父親の顔はもう今は覚えていない。したがって、「今、お父さんは？」と聞かれても、「さあ？ もう死んでるんじゃないですか」と簡単に受け流していた大悟だったが、「父死亡」の連絡を受けると……？ 突然そんなことを知らされて困った大悟は「俺は行かないよ！」と突っぱねたが、それに対する美香と百合子の説得は？

この映画がモントリオール世界映画祭でグランプリを受賞するについて大きく寄与したのは、きっと感動的なラストシーン。それは、既に息絶えた父親の死体を無造作に「処置」しようとする葬儀社の人間たちに対して大悟が割って入り、自ら納棺師としての仕事を始めるシーンだ。見守るのは美香ただ1人だが、大悟はどんな気持で父親の納棺を……？ そして、その作業の中で訪れる感動的なクライマックスとは？
ここで、あなたは涙すること確実！

2008(平成20)年9月19日記